令和４年度やまがた木育推進委員会

日　時　令和４年 10 月 24 日（月）
13:30～15:30
場　所　山形県自治会館２０１会議室

次　　第

１　開　　会

２　あいさつ

３　議　　事

協議事項

（１）令和４年度やまがた木育ロードマップの進捗状況について

（２）令和５年度やまがた木育ロードマップの推進計画について

（３）副教材「やまがたの森林」改正案について

（４）その他

４　そ の 他

５　閉　　会

＜令和４年度やまがた木育推進委員会　議事録＞

〇開会
〇環境エネルギー部みどり自然課長あいさつ
〇委員長あいさつ
〇議事進行

（今村委員長）
　よろしくお願いいたします。
　それでは次第に従いまして、議事を進めて参ります。

（１）令和４年度やまがた木育ロードマップの進捗状況について
　（説明者：みどり自然課木育担当　主査）

（今村委員長）
　事務局から説明いただいたことについて、ご意見、質問等ありましたらお願いしたいと思います。

（横山あずさ委員）
　やまがた木育プログラム体系化ということで、付けたい力、森林ノミクスでどこに当てはまるか等の整理は、実施者が開催メニューを作成するときに、その目的がわかりやすくなり、進めやすくて良いと思いました。それから、リナワールドのイベントは、弊社も一緒に行いました。今回のように企業で木育イベントを実施することになりましたが、実施できる人がその社内に居ないため、人手不足に困っていました。受付等はできるのですが、実際にイベントの運営をどうするのかは、企業としては高い壁になるのを実感しました。そんな時に、この木育人材養成講座の研修を受けた方からお手伝いいただけることは、主催会社は大変喜びました。当日も即興でペアを組んで、受講者の方々に説明をしていただいたほか、客を呼び込むために手づくりのポップを壁に貼り、保育士の方が人材にいらっしゃって、お子さん連れのサポートもしていただきまして、企業側としては圧巻でした。これだけのことができるのかと、大変ありがたかったです。
　この木育人材養成講座の方は、継続しながら、もともと皆様が持つ強みをそれぞれに生かしていただけると本当に良い活動になると感じました。

（事務局）
　リナワールドでＳＤＧｓにちなんだ開催であるということでお誘いいただき、メニューとしてしな織を題材に展開させていただきました。林業職の職員は専門ですが、導入の部分のお話を職員以外の方に担ってもらうことが、今までできなかったところでしたが、今回は運良く、人材の皆様がしっかり話を聞いてくださって、むしろ職員よりも上手だったことが印象的でした。スタイルは思い切ってお任せし、１回託してみることは必要だったと実感しました。

（武田久昭委員）

ロードマップがあると、どこまで進んで、どういう方向性でいくのかということが、すごくわかりやすいと思います。また今回、やまがた木育はこれだということが、さらにわかりやすくなりました。林野庁の方からも発信はありますが、山形がここを目指す、という言葉が非常によく分かりました。あとは、プログラムの体系化も非常にわかりやすいなと思いました。質問ですが、この体系化の表というのは、どこまで公開するのでしょうか。これは学校の方でも、わかりやすくて良いと思ったのでお聞きしたいです。

あとは、先ほどのプログラムの中で、「学び」という言葉が事務局から出ました。参加した子供たち感想の取り方も、ただ楽しかったではなく、その中にどんな学びがあったのかという視点があったのは、良かったです。今後もぜひ、そういう形で進めていただきたいと思いました。あとこれはお願いですが、学校で企画案が出た時に、誰に頼めばいいのかという課題があります。人材養成講座を修了した方に了承を得られれば、人材リストを公開していただくと、さらに進めることができると思います。実際のところ金山町も今年度から町内の小学校が統合して、金山小１校になり、遊学の森のある有屋小学校さんも本校に来ており、木材に触れる機会は非常に多いです。めごたまさんという認定子ども園では、木材を使った積み木もありますし、小学校は低学年が遊学の森に行って、いろんなものを作ります。また、中学年高学年は総合的な学習の中で金山スギの学習をしています。ただ、まだ体系的にうまくいっていません。本校は総務的な学習の時間の中で行うことは決まっており、めごたま園と連携すると、さらにわかりやすくなるのですが、これがまだ漠然としています。総合的な学習の時間でのプログラムがあるのですけれども、ぜひリストをいただければ、すごく助かるなと思います。

（事務局）

体系化を分かりやすいと言っていただきありがとうございます。全体で見れば虫食い状態ですし、「つけたい力」の方でも、高学年にまで影響を及ぼすような高度なプログラムが、まだありません。これから増やしていき、全体を網羅するようなプログラムにしていき、オープンにしていきたいと思っております。また、10 名の方の了解を取り、やまがた木育人材だけではなく、森林環境教育ができる人材も含め、幅広く人材リストはお知らせしていければと思います。

（今村委員長）

環境科学研究センター等、様々な支所の中で、この分野ならアドバイスは誰ができますと、問い合わせに対してすぐお答えできるような体制をとっていただければいいと思います。

（金野やよい委員）

人材養成講座では、その講座を終えられた方が、実際の現場ですぐに活動していただいたということが、とても良いことだなと思いました。木育人材養成講座で、具体的にどのような講座だったのか教えてください。

（事務局）

スタートアップ講座、スキルアップ講座について説明

（金野やよい委員）

ありがとうございます。中身を聞くと、案内人（インタープリター）として活動している皆様にも、満足いただける内容であろうと思います。これは、冬場に開催してもらうことは難しいものでしょうか。県民の森は、夏・秋にかけてイベントが多く、勉強したいと思っても、なかなか参加できない方も多いです。例えば源流の森のインタープリテーション協会でも、冬に協会員を対象にした研修会も企画しているので、雪道は困難ではありますが、近いところでやってもらえれば参加したいという人も居るかと思います。

（髙見佳澄委員）

わかりやすい資料を見せていただいて、本当に様々な活動をしているということを改めて知ることができました。ただ、まだ保護者の間では、木育という言葉が浸透しておりません。私は「ごみゼロやまがた」の委員もしておりますが、そちらですと、「ごみゼロやまがた推進ブック」があります。親に普及するためには、大規模な研修会があるときに配布できる木育に関するパンフレット、ハンドブックがあると、広く周知できるかもしれない、などと思ったところです。

質問が何点かありまして、まず、モデルとなるやまがた木育プログラムの作成が 4 地域ということでしたが、最上の縄文の女神、置賜のわらび餅、庄内のしな織ということで、村山はまだという認識でよかったでしょうか。あとは、プログラムの展開は地域限定なのか、他地域でも行えるのかをお聞きしたいです。

あとは、「行動を起こすことができる人づくり」のところに、「森林林業への就職」があります。やはり親としては子供の就職は大きな問題で、職業がどれぐらいの規模なのかということと、果たしてその職業に就いて、自立して食べていけるのかというのが、親としては気になります。

また、参考資料というのは、誰に見せるための資料なのでしょうか。ゼロカーボン、SDGｓ等、かなり浸透してきたとは思いますが、エシカル消費等の言葉が一般に浸透してない言葉だったので、一般の方が見る資料なのだとしたら、言葉の注釈をつけていただきたいです。専門的な人しか見ないということであれば、このままでいいと思います。

（事務局）

村山のプログラムがまだ無いというご指摘ですが、その通りです。練り上げるのに時間を要しており、これは令和 5 年度に、村山の文化で何かしら森林と結びつけたものを考えていきたいと思っております。もう一つは、4 地域固有のプログラムを作りますが、必ずしもその地域だけではなく、リストから興味があるものや、目的に沿うものを選べるようになればと考えています。

もう一つは就職についてですが、やまがた木育を通して森林や林業に関心を持っていただければ、将来の仕事にしたい、という考えを持つこともあろうかと思います。そのときに、例えば山形県立農林大学校の森林経営学科ですと、極めて実務的な勉強ができて、そこで学んだ人の大半は、林業の現場に就職します。実際に、すでにかなりの人数が、県内様々な現場で働いています。その選択をしたきっかけが、「やまがた木育」の体験であった、という場合を想定しています。あとは、専門職大学が新庄市での開学に向かって進んでいますが、その中にも森林業、経営学科などの学科があり、実務を行いながら、より深く学ぶことができます。あとはもちろん山形大学でも、森林や環境について学ぶことができます。森林・林業に興味が沸いた場合、それを深く学ぶ選択肢が、山形県は整いつつあります。その先の就

職ということでは、若い人に入っていただきたいというのが、現場の切実な願いでもあります。やまがた木育をきっかけに、そういう方が増えれば良いと考えております。

あとは、自立できるかというところですが、大丈夫ですと言い切るのは難しい部分もあります。ちゃんとした給料もいただけるところから、ちょっと厳しい就職口まで様々です。そこは、選んでいただくしかないと思います。ただ、以前に比べれば職業としての環境は整ってきています。以前は３Ｋの職場と言われ敬遠されがちでしたが、今はかなり改善されておりますし、給料も大分、良くなってきているとは思います。ぜひ進んでくださる方がいれば嬉しいと思います。お手元の参考資料に、平成 27 年度から令和元年度までの林業就業者の統計をとっております。林業に就職する方は一定数いて、今は増加傾向です。

（桒原晃委員）

こういったプログラムは理解できましたが、すでにプログラムは多く存在するのではと思いました。例えばやまがた絆の森づくりで、ニューテックシンセイの社員が南陽市の山の整備をやっており、地域の小学生、高校生から山に来ていただいて、そこで森づくり活動をやっています。あとは地域産材の利活用というのもやまがた木育の目的としてあるようですが、もくロックでストラップや、地域材で箸などを作り、森林組合さんから伐倒してもらい、切り倒した木を運ぶ活動や、枝打ち体験などもやっております。特別にこのためだけのプログラムというよりは、活動をしているところと連携すると、プログラムはいくらでも出てくるのではと思いました。

（事務局）

既存プログラムは、集められるだけのものをまとめましたが、確かに様々な場所でプログラムは多くあります。既存のものを参考にしながら、地域固有のものを探していきたいと思います。地域の人材によって、拠点になって広がっているものは、ぜひ進めていってもらいたいと思います。今後もよろしくお願いいたします。

（高橋栄美子委員）

幼児教育の場から、幼子たちがやまがた木育の中の、どこに参加できるかなという視点で見ております。遠い森林であるけれども、幼子たちの一番身近にあるのが、木だと思います。今、私たちが研究している中で、ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）があります。その教育とは、赤ちゃんのときから始まっていると考えております。一番身近なところでは、県から積み木をプレゼントしていただきました。大人が考える積み木遊びは、積んでみて、何か形を作ることを考えますけれども、子供は、３つの部屋をまたいで作って（つなげて）いきます。それから積み木に何か貼り合わせたりして、遊びを開発していきます。先日は、椅子を土台にして高く積み上げていき、先生よりも高くなったので高さを比べることになり、何で測るかと見ていたら、紐を持ってきました。木で遊んでいるものが、学びに繋がる遊びの中の物語になりました。全日本私立幼稚園連合会の東北大会が先日あったばかりで、事例発表をしてきました。助言者の先生から、「山形県だからこんなことができましたね。山形県だから、こんなすてきな積み木をいただいたのですね。」と評価されました。子ども達は、既製品ではない積み木から香りを感じます。触ってみると木のぬくもりを感じます。この会議に継続して参加させていただき、今回の資料を拝見して、みんなで話し合っている、その声が聞こえてきそうな気がしました。随分いろんな活動に広まりましたね。やまがた木育の

進め方に、「触れる」「創る」「知る」とありますが、そこにもう一つ、私は「つなぐ」ということ、次の世代につないで行くことは大事ではないかと思います。次世代を育てる教育がＥＳＤであると考えます。未来社会の担い手に欠かせないサステナビリティの担い手の人を育てていくためには、木のある生活が気持ち良いことや、人と人との関係性が大事であると思います。建物は鉄筋コンクリートではなく、道具（童具）にも木を取り入れていくと、子供たちの成長の仕方が、明らかに違うことを感じております。ですから、こういう活動を、やっぱり県民の方たちに可視化して、アピールできるようになっていたならば、身近なものになっていくのではと思います。こんな良い企画ですので、伝え、そしてつないでいくこと。その１人に私も入っていけたらな、なんて思います。

（事務局）

子供さんは木育に取り組んでいると、必ず木のにおいを嗅ぐようになると聞いたことがあります。

（高橋栄美子委員）

自然に子供たち自身から感じるものなので、指導するものではありません。環境を整え、どんなに高価な教材教具を置いていても、子供たちの心に響かなかったら、それはただの飾りになります。それが木には子供の心を動かす要素がたくさんあります。ともに生きる物として、木のそばに行きたがります。そして、匂いをかいでみたら良い香りがした。触ってみたら、冷たくないと。そして寝そべってみれば床は気持ち良い。それは木だったのだと、子供たちが関心を持ち、感じます。乳児は、木をかじることもあります。でも、木だから大丈夫。そんなふうに、五感を通しての学びが人間の教育の土台のところに欠かせないものだと思います。子供たちが木のおもちゃを、だっこして懐に入れてみたり、なでてみたり、そういう気持ちになるのです。

（事務局）

今回も１０人の木育人材の中に、保育士の方がいらっしゃって、職場であるこども園に木育を取り入れていきたいという考えがあるのかもしれないと感じ、髙橋委員の話と繋がったような気がしました。

（今村委員長）

それでは時間もありますので、議事を進めたいと思います。

（２）令和５年度やまがた木育ロードマップの推進計画について
（説明者：みどり自然課木育担当　主査）

（今村委員長）

今の場合など、今度どういう方をターゲットにして展開するのか、例えば幼稚園、保育園など、お母さんとか、親子で楽しむとか、そういうキャッチフレーズをつけたりしながら、協力いただく施設を募るなど、今度はこちらから、「やまがた木育」は使えませんか？というように、ターゲットを絞ったようなプログラムでやって、そこでの事例を紹介していただいて、それを参考にしていくと、色々な年代に合うプログラムが絞られて出てくるのではと

思います。

（金野やよい委員）

「木育」のイメージが、北海道で始まった言葉の意味しか知らず、森林環境教育など、広い意味合いを含んでいることが全然わかっておりませんでした。それが多分県民の森で、もともと活動している人たちも同じような印象だと思います。活動している皆さんがそれぞれ、考えながらプログラムを組んでいるので、やまがた木育に当てはまるものがたくさんあると思います。なので、新たに担い手の育成をすることも良いことだとは思いますが、もともと活動している皆さんに対して、「やまがた木育」について、もう少し伝えていただけるといいかなと思います。今さらすぎる話なのかもしれないですが、「やまがた木育」の言葉自体が、誤解を生むかもしれません。なので、これから木育推進指導員（仮称）の名前で、目標をクリアするような指導員を育てるのであれば、「木育」の言葉は使わずに、何か新しい言葉を考えたら良いのではと思います。案がなかなか思い浮かばないのですが、ただ、「森林文化」という言葉が、森の環境と人の文化を結びつけている言葉のような気がするので、それをヒントにしながら、何か考えられないかなと思います。

（事務局）

「やまがた木育」を進めていく中で、県民の森のスタッフへの研修もありましたが、私も理解不足と説明しきれていないところがありました。また、森林環境教育がずっと県で培われてきたのに対して、木づかい運動の「木育」が成長の途上だったために、遅れてきた分を取り戻そうとしてそちらに重点を置きました。それが誤解を生んだ原因の一つであると思っておりまして、そこは来年度以降、誤解を埋めながら進めていきたいと思っております。

（今村委員長）

ロードマップの「県民の森サテライト施設としての体制構築」なんですが、その他に山形県環境科学研究センターはどこまで絡んでくれているのでしょうか。あそこは環境学習も同時に行っており、村山とか東根あたりは小学校が勉強会等で施設利用しておりますが、そこでも木育の時間があっても良いのではと思います。

（事務局）

みどり自然課の中でやまがた木育を展開していますが、環境企画課、広くは環境エネルギー部として、目標は変わらず、同じ方向性で取り組んでいるはずですが、なかなか横に連携が取れてないという課題があります。なので、環境科学研究センターで行っている取組みに、やまがた木育も加えていただき、一緒に展開していけるようになれば理想だと思いますので、広げていきたいと思います。

（今村委員長）

県庁の立場からすると、環境科学研究センターを拠点に山形の環境教育全般が展開されているので、そこの中に我々のやまがた木育のグループも位置付けることは大事だと思います。環境科学研究センターが話に出てこないので、（環境企画課と仲悪いのかな？）などと思いまして（笑）。県の中で、先んじてやっているところに、うまく入れてもらうことを要望したいと思います。あとは環境展も今年もありましたけど、ブースを設けて宣伝する、

あるいはその場所自体を指導者養成の場に位置付けて、１日を研修会として運営し、うまく利用するといいのかなと思います。

（横山あずさ委員）

やまがた木育の立ち上げのときから５年が経過し、世の中の状況が変わってきているのを感じます。配布いただいたこの参考資料の中を見ると、今はエネルギー問題、循環型社会、気候変動問題など、最初に「やまがた木育」で集まった時には無かった、喫緊に迫った課題が大きくクローズアップされております。そんな中で、いろいろな課題に必ず森林は関連があり、そういうところも含めて、木に関わる暮らしとか、木に関わる人とか、木を通して触れるものとか、そういうところまで、やまがた木育として少し定義を広げると、色々な人との協働ができたり、民間企業が一緒に展開できたり、やりやすくなるのかなと思います。環境展の中に「ＳＤＧｓ」が位置づけられ、融合したことも象徴的であったと感じました。例えば、「森は空気を作っている工場だよ」という話を聞いたときに、子供でもわかりやすいし、森とともに暮らしがあるというのも感じるので、いろいろな企業、他課などに、木育に参画してもらうのは、やりやすくなると思います。

一点、質問があります。木育のスプーンキットを作成した経緯があり、この教材の開発も、すごく楽しみにしています。また、どうすればそれを入手できるのか、経費的なもの、問い合わせは今後増えてくると思われます。木育キットについての進捗、計画があれば教えていただきたいと思います。

（事務局）

今はスプーン教材があります。これは広まりを見せていまして、作った後に使えるものだということで、要望が多くあります。購入していただくこともありますが、県の施設である県民の森で展開する場合では、みどり自然課で購入したものを提供しています。これが今後も続き、広めていければと思っております。ただ、スプーンを使えるものにするためには難易度が高いことがネックです。今回は、雫型のストラップを開発してきました。今年度は手作業で作っている状況でしたが、制作会社と話し合い、発注しているところです。よって、開発の点では、スプーン以外には雫型ストラップができたところです。

（３）副教材「やまがたの森林」改正案について

（説明者：みどり自然課木育担当　主査）

（今村委員長）

事務局からご説明がありましたが、皆さんから、何かご意見、ご質問等あればいただきたいと思います。

（横山あずさ委員）

県内で木育が体験できる施設リストを入れると足が運びやすいと思います。施設や活動紹介に飛ぶようなリンクでもいいですし、そうした紹介の項目を入れていただければ良いかと思います。せっかく動画も見られるようなので、やまがた木育の絵本「もりはすごいなあ」のＱＲコード入れていただけると、子供さんも楽しめるかと思います。

（武田久昭委員）

今、学校では１人１タブレットなので子供たちは動画を見られます。いろいろな学び方があるので、今回の改定で動画の要素を入れるのは非常に画期的であると思います。ただ、この副教材ですが、5 年生の先生はなかなか使ってくれません。使っている先生も居ますが、1 人読んで終わりっていうところが多いのかなと思うので、担任も、子供たちも、使いやすいようになっているのではと感じます。今から新しくするのであれば、しばらく使うと思うので、使う写真は新しいものがいいと思います。苦労されるとは思いますが、よろしくお願いいたします。

（今村委員長）

「森林を守り育てる」の頁ですが、「私達ができること」の私達は、「大人」＝現在責任を負っている人、という感じがします。では、次の世代の子供たち＝「あなた」はどうするのですか。そういう問いがあってもいいかと思います。ずっと、この本では一般論が続きます。環境教育の一番大事なところは、自分ごとかどうかです。だから、こうでなければならない、という答えはありませんが、何かしら「問い」を最後につけて、オープンエンドで終わっても良いと思います。学校の先生は、それが一言ついてくると楽です。皆、どうする？と書いてあるので、例えばタブレットの中にあなたたちの意見を書きなさい、みたいなことを言えるので、使いやすくなります。

（高橋栄美子委員）

長い年月をかけて木は成長しますが、ともに生きるものとして、先祖がずっとつないできてくれたものであり、おかげで今私たちが住宅だったり、道具だったり、環境だったり、それがあることに感謝をすることは大事です。目の前にいる「あなた」に問い掛けるということは、「継承」と「創造」であると思います。山形での生活は、木との関連の多さを感じます。森林ノミクス会議に出させてもらいましたが、県土の 7 割を森林が占める環境の中に住んでいることは、それが全部関連して、人を育て、後世につないでいかなければならないと思います。私は森林に対しての専門的な知識は無いのですが、これほど人を育てるために必要で、大切なものだったと気づきました。そして命の繋がりと、長い年月をかけて育ってきた木と人の関係は、子育ての教育との関連性を感じています。私も「あなたは」の問いかけに賛成です。さあ、これからどう繋いで、この地球環境をどうしていくのか。それを考えるということが「やまがた木育」だと感じます。

（高見佳澄委員）

先ほど武田先生から、あまり副教材を使っていない先生もいらっしゃるということでしたが、先生方が、使いやすい仕様になっているのでしょうか。あとは、使ってもらえるような「使い方アドバイス」をつけて、各学校に配布していらっしゃるのでしょうか。内容が盛りだくさんですが、何時間ぐらいでこの副教材を使用することを想定して作っているのでしょうか。伝えたい、知ってもらいたいという気持ちは分かりますが、使いやすくて伝えやすくて、決められた時間内に使いきれる教材でなければいけないと感じます。

ＱＲコードで動画を見るというのは、子どもたちの心を引きつける教材だと思うので、使ってもらえる教材になると良いと思いました。

（武田久昭委員）

統計を取っているわけではないので、もしかしたら使っているのかもしれませんが・・・私が勤務した小学校の５年生の先生については、使っております。ただし、副教材なので、必ず使わなければならないものではないのです。でも、使いやすいように、というのは大きいと思います。先生用の解説指導の一冊も一緒に配られますが、ボリューミーで字がいっぱい書いてあります。教材研究としてそれを読んでいる先生も、多分いるとは思いますが、大変かなと思います。教科書があって、環境教育の時数も決まっていますので、そこで先生がどう内容を配分するかだと思いますので、先生方が使ってみたいと思う教材にしていくことが重要です。あとは管理職が、「使いましたか？」とか、県からもアンケートがありますよね。使ったかどうかは、それで把握していると思いますが、やっぱり一番は、使いやすいようにすることです。ＱＲコードは、使ってもらうしかけとしては良いのではと思います。

（今村委員長）

学校現場にはいろいろな副教材副読本があります。ですから、利用率は１%もあれば十分かと思います。いろんな機関がいろんな環境関係の教材を出していますが、ほとんど私も見たことがありません。なので、先生がおっしゃるように、使っている先生がいるというだけでも、非常に健闘している状況だと思います。教科書にプラスアルファで、先生に使う意識が出てこないと使いません。子供たちにも、見たい、使いたいという気持ちが出ないと使いません。実際の現場はそのような状況であろうと思います。その中で、使ってよかったということは、先生方の口コミで広がると思います。使いやすかったよとか、３時間ぐらいの授業の中で、子供たちも結構食いついてくれたよ、というお話があったときに、先生方から学校現場からの事例をもらって紹介するようなことがあると、先生方もハードルが低くなり、使うきっかけになるのではと思います。

（金野やよい委員）

指導者（先生）にちゃんと説明してもらいながら使ってもらえるのが一番だとは思いますが、学校現場で使ってもらえるとは限らないという現状があるのであれば、子供たちが、ちょっと開いてみようかなと思えるような表紙とか、中身のデザインにすると、先生が指導しなくても、子供たちが自発的に見るようになるのではと思います。表紙のデザインとか、中身の写真を大きくする等、工夫すると効果があるのではと思いました。

（今村委員長）

さらにご意見あれば、みどり自然課の方に、今年じゅうにご意見いただければと思います。それでは、一応本日予定した議事はここまでですが、委員の皆様方、よろしいでしょうか。それでは議事については終了させていただきます。事務局では、いろいろなご意見がありましたが、すぐに取り入れられるものもあれば、今後じっくりというものもあると思います。今後精査していただき、やれるものから順番に進めていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

今日は、改めてやまがた木育とは、森林の環境を良くしていくだけではなくて、そのための人材を育成する。そして森林、木を通して、これからの将来を担う子供たちをどう育てていくのかという、広い意味があることを共有しました。名称については、今後どうしていくかわかりませんが、学校とか幼稚園、いろいろな施設で、山形の森林や木を大切にしながら、

我々がいかに上手に生活していくのか・・・つまり、賢く生きるために、上手に森林とつき合い、生活が豊かに、精神的に豊かになっていくことを目指して展開していくということを再確認しました。

事務局とともに、より良いものを作っていければと思います。本日は、忌憚のないご意見をありがとうございました。それでは本日の議事は終了とさせていただきます。ありがとうございました。